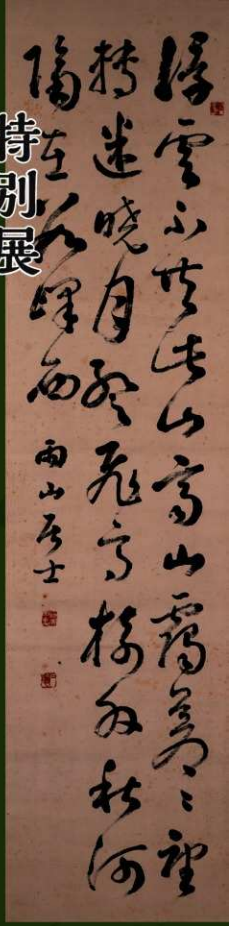
特別展

長尾雨山とその交友

―書画文墨趣味ネットワークの人々

大妻女子大学博物館

「長尾雨山肖像写真」（長尾尚正編「天問室手澤」、大妻学院蔵）



長尾雨山「草書七絶書軸」
大妻女子大学博物館蔵（安見昌幸氏寄贈）

岡昌頴「与古為徒篆額原作（複製）」　大妻女子大学博物館蔵（黄楽輝氏提供、松村茂樹氏寄贈）

長尾雨山「与岸田太郎尺牘」　大妻女子大学博物館蔵（松村茂樹氏寄贈）

ご挨拶

近代の漢学者・長尾雨山は、若き日の文豪・夏目漱石の漢詩を添削し、日本美術の父・岡倉天心に古刹鐘の銘文解読を依頼され、中国最後の文人・呉昌碩と上海で隣人として交流した人物である。そして、米国ボストン美術館中国、日本美術部長であった岡倉天心より、一九一二年一一月、同美術館監査委員を委嘱されると、その記念として呉昌碩に「与古徒(古と徒為り)」扁額を揮毫してもらい、黒漆木額に仕立ててボストンに送り、日本美術文化交流を現出した。

一九〇〇年一二月～一九、四年一二月の上海滞在中は、当時中国最大の出版社であった商務印書館に勤務し、中国最初の整備された小学校教科書である「最新国文教科書」などを編纂した。また、呉昌碩をはじめとする文人たちと交流し、一大人脈を構築した。

帰国後は、中国で学んだ当時最新の文人墨趣味を日本に伝え、それに憧れる日本人士で書画文墨趣味ネットワーク」を築いだ。これに連なったのは、内藤湖南、狩野君山の学界、富岡鉄斎、小林竜山の書画、小川簡斎等の画壇、大養木堂、小川簡斎等の政界、上野有竹、本山松陰等の新聞出版界、さらには、呉昌碩、羅振玉等の中国人士に及んでおり、当時の行き過ぎた欧化風潮に対するカンチーゼの役割も果たした。

さらには、関西書道界の指導者として、当時「六朝書道」としてもてはやされた中国の碑学書法を首倡せず、篆書、隷書以外の草書、行書、楷書は、その典型を確立した王羲之書法で書き、日本書法に本来の美質である王羲之書法の伝統を守った。

今回、京都の安見昌吉氏より、大妻女子大学博物館に長尾雨山・草書七絶書幅が寄贈されたのを機に、長尾雨山とその交友の書画および資料を展示する特別展を開催することになった。夏目漱石、岡倉天心、内藤湖南、富岡鉄斎、犬養木堂そして呉昌碩らの書画と資料を観ながら、雨山の交友及び貢献にまいを馳せていただければ幸いである。

大妻女子大学　文学部
教授　松村　茂樹

長尾雨山について

長尾雨山（一八六四～一九四二）は、通称を栢太郎、名を甲、字を子生といい、雨山、石隠、天の号はいくつかあるが峰を掬して「清時選」は、第三句を「嘯月弊飛千樹裏（夜明けの月はたちまち千樹のうちに飛び）」に作る。印はすべて呉昌碩の刻。

長尾雨山の人脈は、「二人の恩師」である栢太郎の父・東京大学古典講習科卒業後、学習院教師、東京専門学校講師、第五高等学校教授、東京高等師範学校教授兼東京帝国大学講師を歴任、上海に渡り、商務印書館に勤務する。帰国後は、京都に寄寓し、平安書道会会長等を務めつつ、在野の学究として尊敬を集めた。

凡例

一　本図録は、二〇二五年一月一四日から二月二八日まで、大妻女子大学博物館において開催する特別展「長尾雨山と その交友」の展示図録兼ホットワークの入手の際に頒布する図録である。

一　この特別展は、松村茂樹（資料番号1～2、4～6、9～19、21～23、25～28、29、34～45、47～53～57、8～20、27～30、46）、青木俊郎（大妻女子大学博物館学芸員）、資料番号7～8、20、24）が執筆した。本図録の編集および局編集は青木俊郎（大妻女子大学博物館学芸員）、田原有紀子（同）、末次栄子（学務助手）がつとめた。

一　資料の解説は、松村茂樹（資料番号1～2、4～6、9～19、21～23、25～28、29、34～45、47～53～57、8～20、27～30、46）、青木俊郎（大妻女子大学博物館学芸員）、資料番号3、24）が執筆した。

一　資料解説には、名称、作者、年代、数量形態、所蔵、寸法（㎝）を記載した。また数量の順序は、必ずしも、一致しない。

一　本図録は、大妻女子大学人間生活文化研究所共同研究プロジェクト「雲間草書号K、二六、扶桑雲間」「長尾雨山との交友」展の開催と大学博物館の活性化に向けて」の助成により発行するものである。

解説

1　草書七絶書幅

長尾雨山　大正・昭和時代
一幅　大妻女子大学博物館（安見昌幸氏寄贈）
縦一九七　横五三・二　本紙　縦二六八　横三三

唐の韓愈「宿石鼓山中（石鼓山中に宿す）」詩を草書で書いている。

「浮雲不共此山齊、山高人遠一峰孤。峰月登飛高絶外、秋河隔在敷峰西」（浮かぶ雲もこの山と並ぶほどの高さはなく、山に かかる孤は蒼々として孤独を迷わせる。夜明けの月は登り高樹の外に飛び、天の河はいくつ峰の峰を隔てた西にある。）（時詩選は、第三句を「嘯月弊飛千樹裏（夜明けの月はたちまち千樹のうちに飛び）」に作る。印はすべて呉昌碩の刻。

2　老梅図軸

長尾雨山　松村茂樹氏　大正・昭和時代
一幅　本紙　縦三九五五　横三二二
縦一〇・・　横五〇・六

自作の老梅図に自作の詩を行草書で題している。「千尺寒石清古渭（千尺の寒々とした山峰が古渭という辺境の地にあり、老梅が水に臨て、一枝を垂らしている。山中には老梅のことを聞きに来る人はおらず、花の開落はこれまでただ老梅自身が知っているだけ。石隠（別号）井題。）雨山帰国後の孤高を老梅に掘した作。印はすべて呉昌碩の刻。

3　与岸田太郎尺牘

長尾雨山　大正七年（一九一八）八月三一日
一通　大妻女子大学博物館（松村茂樹氏寄贈）
縦一九二　横八三三　封筒　縦二一　横八三

雨山が、岸田太郎（?～一九一九）に宛てた侑やみ状。岸田の母の訃報に接して送ったもの。岸田太郎は、ジャーナリスト・実業家の岸田吟香の二番目の弟・万三郎の長男で、雨臣と号した。吟香が上海に開いていた東洋新聞に住み、日華新報社主任などを務めた。上海では雨山と終生交流し、一九一三年、王羲之の蘭亭宴から二六周目にあたる癸丑の年を記念して雨山が発起した蘭亭行に参加、紀行文「蘭亭紀行」を執筆した。

4　犬養木堂・羅振玉・長尾雨山等書画帖

長尾雨山等　大正時代
二帖　大妻女子大学博物館
縦一四・　大妻女子大学図書館

第一九代首相をつとめた犬養木堂が、折帖一冊に自ら題字を認めた上で、交友の交わりを有る知友に雨山等を求めた書画帖。羅振玉、柚木玉郷、長尾雨山、小林秋堂、黄以霖、宗屋弓、前田黙鳳、山本梅荘、滑川漁如、柳原鐵砲ら、という書画交墨趣味ネットワーク」に連なる面々が揮毫している。雨山は、第一冊に墨梅図を寄せている。「一枝茅屋背、走出断橋西。臨水清愁歌、倚風聚更芳。雪消鄰魂、月落角声長。同調梅癖竹、瘦葉雨共宅。朶共初秋、雨山井題。」

5　金渓真景図

長尾雨山題　吉村赤松画　大正・三年（一九一四）
一巻　大妻女子大学図書館
縦二五・六　横一〇八

吉村赤松（一八五七～一九二四）、名は孝、大阪南河内の人。南画家。この画は、赤松が大正・三年初夏（旧暦四月）、諸友と大阪京南の金剛寺に観梅に行った際、近くを流れる金剛寺川（金渓）の緑色を画き、併せて二絶を賦して題したもの。雨山はこれに「金渓攬秀（金渓の優れた景色を目におさめる）」と題している。吉村家は、南河内の豪農で、吉村郎は、昭和二一年、民間住宅をして初めて国宝に指定された、赤松もまた、宮内省陵墓寮長を務めている。

6　懐旧画冊

長尾雨山題　柚木玉郷等　大正時代
二帖　大妻学院
縦一〇・七　横三二七他

岡山倉敷出身の朝鮮総督府鉄道局技師山田亀治が、知友に揮毫を求めた書画帖二冊からなり、第一冊に同郷の書画家　柚木玉郷を求めた書画帖。巻頭に詩画を題している。雨山は、第一冊の巻頭に「荘子」「田子方篇」に見える「目擊道存」（道を体得した人物は、一目見てわかる）を「隷書」に題している。この帖には、ドイツ人博士 Kiri, Wolfgang、原澄治など山田の人脈と、高野竹隠、藤波子渓など玉郷の人脈が揮毫しているが、雨山は後者の筆頭となっている。

7　最新国文教科書

小谷重・長尾甲太郎・雨山・高鳳謙・張元済校訂
光緒三一年（一九〇五）　一冊　大妻学院
縦二一・　横三二八

小谷重（一八七四～?）、元文部省図書教育官、金港堂編輯部長、「最新国文教科書」の編集に関わった商務印書館が右の本の出版社金港堂と合弁していたので、雨山は小谷と共に教科書の執筆に首脳した。高鳳謙（一八七〇～一九三六）、福建の人、張元済（一八六七～一九五九）、浙江の人、官僚・政治家、出版実業家、商務院書館に新設された編訳所所長に就任、雨山にとっては同僚であった。

8　共和国教科書新国文

高鳳謙・張元済校訂　中華民国一三年（一九二四）
一冊　大妻学院
縦一九・五　横一三・一

宋の「蘇東坡全集」の「最新国文教科書」と同じく、小谷と雨山が編纂に関わっていない。しかし日清戦争（一八九四）後に反日感情が高まり、日本人が教科書編纂に関わったことは伏せられるようになったため、両者の名前は教科書に記されていない。学習者に配慮した教材の配列順や挿図の使用用などに編集上の工夫が見られる教科書である。

9　丙辰寿蘇録

雨山謙誠・長尾雨山編　大正七年（一九一八）
一冊　大妻女子大学図書館
縦二二・　横一二・六

雨山は、「富岡鉄斎の子富岡桃華と共に、大正五年（一九一六）一二月一日（陰暦乙卯一二月一九日）、京都の円山春雲楼（左同所）で、乙卯寿蘇録とした。雨山と桃華は、これを毎年の例会とし、翌大正六年（一九一七）一月一二日（陰暦丙辰一二月一九日）も同所で丙辰寿蘇会を開催し、丙辰寿蘇録を編した。羅振玉の扉題、陳老蓮の挿画、内藤湖南の序、雨山の序がある。

10 丁巳寿蘇録（ていしじゅそろく）

長尾甫山編　大正九年（一九二〇）
一冊　大麦女子大学図書館
縦三三・三　横一三

大正七年（一九一八）一月三一日（陰暦十日）二月一九日、これまで同様左阿弥で開かれた「巳寿蘇会は、甫山一人の主催となった。共催者であった富岡鉄斎は、この年の二月一三日に病没し、翌年、翌年に予定していた第四回寿蘇会を取りやめ、丁巳寿蘇録もその年に刊行された。羅振玉の封面、富岡鉄斎の題画、内藤湖南の序、甫山の序がある。

11 己未寿蘇録（きびじゅそろく）

長尾甫山編　大麦女子大学図書館
一冊　大麦女子大学図書館
縦二六・七　横一三

甫山は、大正九年（一九二〇）二月八日（陰暦七日）、生涯最後となった丙子寿蘇会を京都岡崎のうち家で開催した。その際、それまでの寿蘇会に寄せられた各家の詩文を集めた寿蘇集を刊行し、招待客に贈った。当時、平安書道会副会長であり、出席者の多くも書道界に関わる人々で、甫山の役割も、漢学者・漢詩人を束ねることから、書道界に書画文墨趣味の本質を伝えることに移り変わっていたことがわかる。

12 寿蘇集（じゅそろく）

長尾甫山編　昭和二年（一九二七）
一冊　大麦女子大学図書館
縦二六・五　横一二・四

甫山は、昭和二二年一月三一日（陰暦丙子二二月一九日）、生涯最後となった丙子寿蘇会を開催した。この時には七回目を迎えていた。その際、それまでの寿蘇会に寄せられた各家の詩文を集めた寿蘇集を刊行し、招待客に贈った。当時、平安書道会副会長であり、出席者の多くも書道界に関わる人々で、甫山の役割も、漢学者・漢詩人を束ねることから、書道界に書画文墨趣味の本質を伝えることに移り変わっていたことがわかる。

13 蘇文忠公詩集（そぶんちゅうこうしゅう）

宋・蘇軾撰　清・紀昀評点　長尾甫山旧蔵　中国清代
二冊　大麦女子大学図書館
縦二五・五　横一四・七他

甫山の旧蔵になる宋の蘇軾（東坡）の詩集で、清の紀昀（ちゅうこう）の評点を付している。甫山は、これに甫山舜堂（ほさん）の印を捺し、大切に蔵した。甫山の旧蔵書籍は、昭和八一年（一九八八）ころ、京都国立博物館に入寄されるとともに、東京都目黒区の目黒雅一氏が京博にそれらの目録を決め、それ以外のものを山本書店が買い入れた。これは山本書店より大麦女子大学図書館が購入したものである。

14 天璞集

長尾甫山作　谷土陳合編輯兼発行　大正八年（一九一九）
一冊　大麦学院
縦一八・七　横二二・四

大正八年（一九一九）三月三一日～六月一日、飯田呉服店（現高島屋）大阪心斎橋店美術部で開催された長尾甫山先生詩画展覧の図録。これに、この展覧のために百点の書画を作り、中には稀覯の「蘭石鼓文」も含まれている。当時同美術部長であった谷土陳合は、京都美術工芸学校で高浜鉄斎の教えを受け、その若富岡桃華と親友の盟を結び、桃華の紹介で甫山と交わった。そして甫山のために展覧会を企画し、この図録も編輯発行したのである。

15 无閑至手澤（むかんしてたく）

長尾甫山正編　昭和一七年（一九四二）
一冊　大麦学院
縦三〇・二　横二・四

甫山は、昭和一七年四月一日、京都西洞院（にしのとういん）太刀上（たちあがり）閑居にて七九歳で没した。甫山の一男冘正は、その百日祭を記念し、本冊子を編輯した。題簽を狩野君山に依頼し、甫山の肖像、略伝、居室、甫山の書画が載る「无遺」等の典籍、詩文稿、跋文、書画、刻印を写真版に収めた。当時、すでに太平洋戦争が始まっており、冘正の苦心がうかがえる。その冘正は昭和二〇年、惜しくも戦死した。

16 行書題画詩軸

呉昌碩　大正八年（一九一九）
一幅　大麦女子大学博物館（宮崎閑子氏寄贈）
縦一〇三・五　横一〇　本紙　縦一三・二九　横三三・六

呉昌碩（ごしょうせき）（一八四四～一九二七）、名は俊卿、浙江安吉の人。詩書画印四絶をもって中国最後の文人と称せられる。晩年、上海に住し、多くの日本人士に敬愛された。甫山は、京都の家具宮崎三代目、宮崎平七の為に、自作の題詩を行書で模倣したもの。「瀟洒郎過人影、山風盡落石頭、秋色江南如此、幾時帰去湖州」題画詩。己未小雪節、于海上呉駐廬縁笑、呉昌碩七十六」。

17 与古為徒（古と徒為り）扁額原件（複製）

呉昌碩　大正元年（一九一二）
一点　大麦女子大学博物館（黄紫輝氏提供、松村茂樹氏寄贈）
縦八五・九　横一九・四　本紙　縦九〇・六〇九

ポストン美術館蔵呉昌碩（ごしょうせき）「与古為徒（古と徒（とも）為り）」扁額は、一九一二年秋、甫山が、ポストン美術館蔵呉昌碩作品を記念して、呉昌碩に揮毫を依頼し、黒漆木額に仕立て、上海から、ボストンの岡倉天心宛に送ったものである。〇〇〇〇年末、その原件（「田桑旭旦蔵」）が世に出た。黄紫輝氏の蔵に帰った。原件には呉昌碩の跋語がとんでもない。ポストンの黒漆木額は、甫山が原件を跋語をアレンジしたものと思われる。黄氏には、原件複製をボストン美術館へ寄贈した。

18 人物図色紙

王一亭　大正・昭和時代
一枚　大麦女子大学博物館（松村茂樹氏寄贈）
縦一七・七　横一九・四

王一亭（おういってい）（一八六七～一九三八）、名は震（しん）、浙江呉興の人。実業家、書画家。呉昌碩の弟子で、甫山と呉昌碩を通して知り合った。日本の日清汽船株式会社賞弁を務めていたことから、日本人士との交流が多い。この作品は、紙本の色紙に、竹林で石に腰かけて書を読む人物が描かれている。色紙は日本のものなので、おそらくは甫山の依頼によって作られた思われる。関謐冬葉筱氏で、日本人が求める中国文人の姿を的確に表している。

19 草書自作詩軸

夏目漱石　明治～大正時代
一幅　大麦学院　本紙　縦三三　横二四

夏目漱石（一八六七～一九一六）、名は金之助、江戸牛込の人、文学者。第五高等学校教授時代、同僚である甫山に漢詩の添削を受けている。この作品は、『漱石全集』「日記・断片」の「明治四三年一〇月一日」に見える五言絶句を書いている。「日記」では無題だが、この作品は、「病中偶成（病中偶成）」を題名とする。「日射ス春水、心随野水空。秋思花一片、閑落小眠中。（日は春のように長く、心は野川の空を追う。床頭の花一片が、小眠中に閑かに落ちる。）」

20 行書薛君采題画詩軸

犬養木堂　明治～大正時代
一幅　大麦学院　本紙　縦一三・三　横五二・六

「犬養木堂（ぼくどう）（一八五五～一九三二）」名は毅、岡山の人、政治家、大正八年（一九一九）に開かれた羅振玉の送別会に甫山と、内藤湖南らと参加。これは明の薛恵（せつけい）字は君采の「題画」詩を行書で模倣したもの。二石碩初安茶白、茅檐時拂砂雲。天外青山厳々、門前白鳥雙々。薛君采題画、木堂。」石段に茶白を敷き、線香の煙が時に薄絹を張った窓にかかる。遠か遠くには草木が青々と茂る山が並び、門前には白い鳥が対になって飛ぶ。薛君采「題画」、木堂。」

21 虚心竹図短冊

富岡鉄斎　明治～大正時代
一点　大麦学院
縦二六・二　横八・〇

富岡鉄斎（一八三七～一九二四）、名は百錬、京都三条の人、南画家。幹旋で室町通に子の富岡桃華と共に住む。甫山は、富岡鉄斎と父子ともに親しく交わった。この作品、短冊に淡墨で竹葉を重ねて竹を画き、やや濃墨で、柴松崗蔵筆、虚心有低頭葉、鉄斎」と、柴松崗のもとで鍛れた画くわだかまりのない竹に、短冊を重ねる墨がある。鉄斎」と題している。柴松崗とは、京都の唐紙商柴田松崗のことで、鉄斎壮年の旅の伴侶であった。

22 篆書周司寇重銘軸

山本竟山編　明治～大正時代
一幅　本紙　縦一五・六　横一七・五

山本竟山（一八六三～一九二四）、名は由定または録定、岐阜の人。書家、日下部鳴鶴門下の高足として関西書道に重きをなした。竟山は、帰国後の鳴鶴門下の高足として関西書道に住まわせ、自らが創設した平安書道会を自らも退いて改組し、実質的会長である副会長に就任させている。この作品は、周司寇重銘を臨書し、釈文を欄書として付している。「周司寇重銘、司寇良父作為衛姫重、子子孫々永保用。壬戌正月横三清和居、竟山録完。」

23 行草書安居歌軸

本山由隆　明治～昭和時代
一幅　本紙　縦三〇・九　横三・二

本山松隆（しょうりゅう）（一八五二～一九二三）、名は彦一、肥後熊本の人、実業家。藩校時習館で学ぶ。後上京、福沢諭吉に師事、時事新報社を経て大阪毎日新聞社長を務め、甫山が知遇すると、同新聞の漢詩壇選者とした。この作品は、宋の蘇軾（そしょく）「松隆は「安居歌」とするを行草書で書いている。「安居歌、心安身自安、身安室自閑、心與身俱安、何難能相干。蘇謂一身小、其安若泰山。蘇謂一室小、寛如天地間。時事堂主人清嘱。松隆老人」

24 万葉仮名自作歌軸

正木直彦　昭和七年（九三二）一・二月三日
一幅　大麦学院　松村茂樹氏
縦一九・五　横四九・四　本紙　縦一三・四　横一二・六

正木直彦（一八六二～一九四〇）は、明治～昭和前期の美術行政官・教育者。甫山と正木はともに東京美術学校に勤務しており（甫山は、明治三四年三月まで、正木は中国で商務印書館主・李宜興と会った際、甫山のことが話題にについている（十三松堂日記）二巻、二月一七日条）。『潮騒（しおさい）』魚津（うおづ）付近から東方にそびえる雲を抱いた立山（たてやま）（富山県）を詠んだもの。

25 寒菊図短冊軸

今尾景年　明治～大正時代
一枚　大麦学院　本紙　縦二七・七　横二六・九

今尾景年（一八四五～一九二四）、名は永觀、京都衣棚通の人、日本画家。呉昌碩の弟子で、甫山とは、幼年期に師弟関係にあった。甫山は、景年の作品を通して知り合った。日本の日清汽船株式会社賞弁を務めていたことから、日本人士との交流が多い。この作品は、紙本の色紙に、竹林で石に腰かけて書を読む人物が描かれている。色紙は日本のものなので、おそらくは甫山の依頼によって作られた思われる。関謐冬葉筱氏で、日本人が求める中国文人の姿を的確に表している。

26 行草書酔醒吟詩軸

藤沢南岳　大正元年（一九一二）
一幅　大麦学院　本紙　縦一九・一　横二・七

藤沢南岳（一八四一～一九一二）、名は恒、字は君成、讃岐高松の人。漢学者、儒学者、藤沢東畡（とうかい）の長男として生まれ、父が興した大阪の泊園書院を継承し、門人数千人を数えた。甫山は、同郷の先賢田の松原（まつばら）琴林碑を書いている。これは、「酔醒（すいせい）詩を行書で揮毫したもの。「酔鬼陶々醒鬼真、一眠一覚酔醒身。酔醒世界是非外、流水落花秋又春。酔醒吟。七十一翁南岳。」

27 行書杜甫詩扇面軸

鈴野君山　大麦学院
一幅　七・八　横八・七　本紙　縦七三・八　横五三・七

鈴野君山（一八六八～一九七七）、名は直喜、君山は号。柴本の人。中国学者。長尾甫山、内藤湖南と共に日本の中国学を開化・進展させた。人に挙げられる。これは甫山の詩「言を行書で揮毫した前半の文は、杜興八首之四」「間道長安奏根」は長安をめぐる争乱の歴史に思いを馳せた作。後半の「江漢（こうかん）江漢帰客」は望郷の念に駆られ苦しい状況にありながら才能を自負する感情を詠んだもの。

28 後園秋色図軸

小室翠雲　大正二年（一九一三）
一幅　大妻学院
縦二〇三・八　横五六・四　本紙　縦一三一・五　横三一・五

小室翠雲（一八七四―一九四五）、名は貞次郎、栃木（現群馬）館林の人。日本画家。南画を田崎草雲、詩文を山下雪窓に学ぶ。大正一〇年設立の日本南画院に参加し、顧問の雨山と交流した。この作は、樹下を飛ぶ蝉を画き、唐の趙嘏「聴蝉」詩を款書としているが、自題の箱書に「後園秋色図紙本」とあり、自らの裏庭の情景なのであろう。「噪蝉声乱日初曛、弦管楼中永不聞。独奈愁人数茎雪、故園秋隔五湖雲。癸丑六月、写於承露閣中。翠雲。」

29 臨隋智果書

榊原鐵硯　明治四一年（一九〇八）
一帖　大妻学院
縦三〇・六　横一六・五

榊原鐵硯（一八五五―一九三七）、名は浩逸、泉州泉南の人。米国で鉄道営業を学び、帰国後は日本の鉄道界に貢献した。晩年は犬養木堂の推輓で書画家となり、木堂を介して雨山と交わった。この作は、『大観帖』「隋智果評書帖」を臨書したもの。冒頭に「隋智果書、鐵硯臨書第三」、末尾に「戊申五月十五日、泉南鐵硯三臨」とあり、三回目の全臨であったことがわかる。また、後見返しに別筆で「遺物榊原」とあり、鐵硯没後に形見分けされたものであろう。

30 行草書自作詩軸

荒木鳳岡　昭和時代
一幅　大妻学院
縦二一九　横六三・五　本紙　縦一四六・八　横四三・四

荒木鳳岡（一八六六―一九四二）、名は寅三郎。医学者。群馬の人。京都帝国大学総長、学習院院長などを歴任。雨山、内藤湖南、犬養木堂、狩野君山らと共に羅振玉帰国送別会に参加。平安書道会会長に就任し、雨山が副会長を務めた。これは医学者の富田雅次（一八八九―一九六五）のために「帰家」詩を行書で揮毫したもの。「門外絶無車馬喧、寒煙喬木荒村。明知気節因庭訓、便道文章報国恩。匑頌送行今日尽、割氈分席幾人存。篋中猶有孝経在、且与児曹仔細論。帰家。博富田博士一粲。鳳岡。」

31 行草書自作詩軸

副島蒼海　明治時代
一幅　大妻学院
縦二〇四・二　横七〇・八　本紙　縦一四九・三　横五一・七

副島蒼海（一八二八―一九〇五）、名は種臣、蒼海は号。佐賀の人。政治家。副島が外務卿の時、マリア・ルース事件や台湾事件に対して日本の威信を世界に高める措置を取った。これに少年時代の雨山は感激し副島を尊敬した。後に雨山は副島の知遇を得ることになり、人格を磨き学問を深める上でも副島より大きな影響を受けた。これは「寓居即事五首之四」を行書で揮毫したもの。「春夏秋冬自成歳、園林華実自垂垂。門雖不閉無来客、真是先生安適時。副島種臣。」

32 行書論画一則扇面

内藤湖南　明治～昭和時代
一点　大妻学院
縦二七・四　横四四

内藤湖南（一八六六―一九三四）、名は虎次郎、字は炳卿、湖南は号。秋田の人。歴史学者。日本の近代史学の礎を築いた。羅振玉帰国送別会に雨山らと共に参加し、雨山が主宰した寿蘇会にも参加した。これは行書で画論を揮毫したもの。「清代院画尤喜海西之法、絵影設色以分明暗。焦陳諸人由東学西、郎氏西人参以東法、其帰一也。論画一則。松山君正之。湖南查客。」

33 松茂山荘記草稿軸

西村天囚　大正一三年（一九二四）三月
一幅　大妻女子大学図書館
縦一二八・五　横五二・五　本紙　縦二四・四　横三二・八他

西村天囚（一八六五―一九二四）、名は時彦、天囚は号、別号に碩園。鹿児島の人。漢学者、ジャーナリスト。長尾雨山は上海から帰国後、敬慕する宋の蘇東坡を記念する寿蘇会を主宰し、西村も参加している。これは原田大観（一八五五―一九三八）の建てた松茂荘の命名の由来について述べたもの。大観は号で名は庄左衛門。埼玉の人。出版社原田博文堂の創業者。犬養木堂や雨山とも交流があった。寿蘇会には周旋者として参加した。原稿には瀧川資言（名は亀太郎、号は君山）等による校正の書き入れがある。

34 缶廬遺墨集

呉昌碩　昭和三年（一九二八）
一冊　松村茂樹氏
縦三六・三　横二五

呉昌碩は、一九二七年一一月二九日に没した。高島屋呉服店美術部は、昭和三年一月二二日～二六日、大阪長堀店で「呉昌碩遺墨展覧会」を開催し、その図録として同年一月五日、堀喜二編輯兼発行『缶廬遺墨集』を刊行した。雨山は、この題簽、封面、序を書いている。序に、帰国する雨山と呉昌碩の別れの語らいが述べられている。「予与先生話別淞浜。先生懐送別詩来、執予手云、君遠去矣、僕既老矣、恐不可再見矣。言未畢而双涙並下。」

35 一亭近画

王一亭　大正一一年（一九二二）
一冊　松村茂樹氏
縦三五　横一七・六

高島屋呉服店美術部は、大正一一年三月一七日～二一日、大阪江戸堀店で「王一亭近作書画展覧」を開催し、その図録として、同年三月一〇日、谷上隆介編輯兼発行『一亭近画』を刊行した。雨山は、この題簽、封面、序を書いている。序に、王一亭の画を称えた後、以下のように述べている。「予曽流寓淞濱、與君交尤稔。一別天涯、久労春樹暮雲之思。」（私はかつて上海に流寓し、君ととりわけ親しく交わった。別れて以来、久しく遠くの友を思っている。）

36 茶の本（The Book of Tea）

岡倉天心（Okakura Kakuzo）　一九三二年
一冊　大妻女子大学図書館
縦一八・五　横一二・五

岡倉天心（一八六二―一九一三）、名は覚三。福井の人、横浜生まれ。東京大学でErnest Francisco Fenollosaの助手として美術研究に携る。東京美術学校初代校長辞任後、一九〇四年、William Sturgis Bigelowの紹介でボストン美術館顧問となり、一九一〇年、中国・日本美術部長に就任した。『茶の本』（The Book of Tea）は、一九〇四年、ボストン美術館で縫製の奉仕をする女性たちに話したメモおよび関連講演をまとめたもので、一九〇六年、ニューヨークのFox, Duffield & Companyから出版された。これはその第一六版。

37 茶の本（The Book of Tea A Japanese Harmony of Art Culture & The Simple Life）

岡倉天心（Okakura Kakuzo）　一九一九年
一冊　大妻女子大学図書館
縦二一・五　横一二

天心は、雨山と明治一八年頃、漢詩人森春濤の詩会で知り合い、東京美術学校創設や美術雑誌『国華』創刊にも雨山の助力を求めた。ボストン美術館に行ってからも中国美術収集や古銅器銘文解読を依頼し、一九一二年には鑑査委員を委嘱している。『茶の本』（The Book of Tea）からは、天心の高度な中国文化理解が窺えるが、その形成の一端には、雨山の存在があった。これは、一九一九年、'The Book of Tea A Japanese Harmony of Art Culture & The Simple Life'と題して、エディンバラのEdinburgh : T.N. Foulisより刊行されたイギリス版初版。

38 桃華盦古鏡図録

富岡桃華　大正一三年（一九二四）
一冊　大妻女子大学図書館
縦二九・九　横二九

富岡桃華（一八七三―一九一八）、名は謙蔵。京都の人。富岡鉄斎の長男として生まれ、父の薫陶の元で学んだ。京都帝国大学文科大学講師となり、一九一〇年、狩野君山、内藤湖南、小川琢治、濱田耕作と共に、北京に出張した。一九一六年、雨山と共に寿蘇会を提唱主催し、書画文墨趣味ネットワーク形成に貢献したが、その翌々年、四五歳で夭折した。これは、嗣子の益太郎が、父の蒐集になる古鏡六五種を影印し、狩野君山に序と題字を依頼して出版したもの。

39 木堂翰墨談

犬養木堂講話　長尾雨山補評　大正五年（一九一六）
二冊　松村茂樹氏
縦一九・三　横一二・六他

犬養木堂（一八五五―一九三二）、名は毅。備中川入の人。政治家。慶応義塾中退後、報知新聞記者などを経て政界に入り、立憲政友会総裁、第二九代内閣総理大臣に至ったが、五・一五事件の凶弾に倒れた。中国通として知られ、日本に逃れてきた康有為、孫文、蒋介石などをかくまった。また、書画に造詣が深く、この講演録からも高い見識が窺えるが、木堂は謙虚に雨山に補評を求め、さらに題簽、封面、序も雨山に嘱している。

40 竹坨遺集

阿南竹坨　昭和九年（一九三四）
三冊　松村茂樹氏
縦三〇・二　横一五・三他

阿南竹坨（一八六五―一九二八）、名は衡。豊後竹田の人。書画家。書を清人の尤文欽、画を守山湘帆、儒学を田中萬谷に学ぶ。明治四四年、清に渡り、楊守敬、呉昌碩らに益を受ける。雨山とはこの時、上海で知り合った。『竹坨遺集』は、竹坨の没後編纂され、雨山が題簽、封面、序を書いている。雨山は序の中で、「おそらく意気は並ぶ者がなく、識見は古今に通じていると思われ、私はそれによって奇士とした。（原文漢文）」と記している。

41 天機集

江上瓊山　大正九年（一九二〇）
一冊　大妻学院
縦一八・二　横一二・四

江上瓊山（一八六二―一九二四）、名は景逸。長崎の人。南画家、書家。南画を守山湘颿、書を岡田篁所に学び、明治三七年、清国に遊んで、呉昌碩等と交わり、帰国後、京都室町通りに居を定めた。『天機集』は、大正九年九月、大阪江戸堀の高島屋美術部で開催された「江上瓊山画伯新作画幅展覧会」の図録で、雨山が題簽、封面、序を書いている。雨山は序の中で、「（帰国後）、瓊山と相近くで意気投合して画を論じ、遅い出会いを恨んだものだ。（原文漢文）」と記している。

42 双璧斎画存

柚木玉邨　昭和六年（一九三一）
一冊　松村茂樹氏
縦三四・七　横一九・一

柚木玉邨（一八六五―一九四三）、名は方啓。備中玉島の人。画家。東京帝国大学卒業後、銀行取締役等を務めたが、胡鉄梅に南画を学び、画家として名を馳せた。『双璧斎画存』は、その画集で、呉昌碩が封面を、雨山が題簽、序を書いている。雨山は序の中で、「近頃の芸術家は、新しさを競って奇を衒い、世間の好みに迎合しており、古から遠のいているのではないか。この書が出ることにより、正派がかろうじて保たれよう。（原文漢文）」と記している。

43 蘇竹墨縁

小栗秋堂　大正四年（一九一五）
一冊　松村茂樹氏
縦二八・一　横一六

小栗秋堂（生卒年未詳）、名は元直。大阪の人。画家、収蔵家。上海で雨山と親しく交わり、大正二年三月三日（旧暦）、雨山主催の蘭亭行に加わっている。『蘇竹墨縁』は、大正四年四月、自らの居である蘇竹庵に所蔵の書画三〇件を展示した際の図録で、呉昌碩序、内藤湖南序、雨山序、秋堂小引、木蘇岐山跋が附せられている。雨山は序の中で、「中国に往来すること十余年、刻苦して書画を捜訪し、得るところは甚だ多い（原文漢文）」と記している。

44 超然楼遺稿

木村得善　昭和一一年（一九三六）
二冊　大妻学院
縦二五・八　横一六・四他

木村擇堂（一八六一―一九三五）、名は得善。京都の人。詩人、書家。医師の家に生まれ、京都市立京都病院院長を務めた。また、宮原節庵、石津灌園について儒学を修め、雨山の帰国後は、雨山に師事して詩を善くした。大正八年六月二日、京都円山の左阿弥で開かれた羅振玉帰国送別会の記念写真に見える三八名の氏名を毛筆で記しており、書画文墨趣味ネットワーク研究の重要資料となっている。『超然楼遺稿』は、没後に編まれた詩集で、雨山が題簽、封面、序を書いている。

45 蘇戡公最後遺稿

鄭蘇戡　昭和一七年（一九四二）
一冊　松村茂樹氏
縦二七・九　横一五・五

鄭蘇戡（一八六〇―一九三八）、名は孝胥。福建閩侯の人。政治家、書画家。光緒八年の解元（郷試首席及第者）、一八九一年東京に赴任して副領事となり、同年一二月一二日に雨山と知り合い、生涯の交友となる。廃帝溥儀の側近となり、一九三二年、満洲国総理となるが、一九三五年、辞任した。これは、一九三八年三月六日、新京（現吉林長春）の協和会館における王道書院の第一回講演会の原稿で、没後、最後の遺稿として出版された。

46　西遊詩草
鈴木豹軒　昭和二六年（一九五一）
一冊　松村茂樹氏
縦二五・八　横一七

鈴木豹軒（一八七七―一九六三）、名は虎雄、豹軒は号。新潟県の人。中国文学者。長尾雨山が開催した寿蘇会に鈴木も数回参加している。この詩集は青木正児の漢文による跋文によれば、鈴木豹軒が昭和二六年（一九五一）五月二六日から六月五日頃までに、京都から岡山、山口、広島へと旅をした時に詠んだ詩をまとめたもの。そこには青木のほか大谷新一郎、河野通毅、石黒俊逸などが同行した。

47　竹外翁遺墨集
姫島竹外　昭和五年（一九三〇）
一冊　大麦学院
縦三六・五　横二四・九

姫島竹外（一八四〇―一九二八）、名は純、筑前博多の人。日本画家。福岡藩士の家に生まれ、父につて朝倉孝之、二天流剣法皆伝を受けた。また、村田東園、石丸春牛に師事して南宗画を学ぶ。明治維新後は、大阪甕草山のち中之島に移り、大阪画壇の重鎮として尊ばれた。これはその遺墨集で、雨山が題簽、封面、序を書いている。雨山は序の中で、「先生はいつも謹厳で、家人子弟はその惰容を見たことがない（原文漢文）」と記している。

48　碧堂先生画観
田辺碧堂　昭和三年（一九二八）序
一冊　松村茂樹氏
縦三一・六　横一六・六

田辺碧堂（一八六四―一九三二）、名は華、備中長尾の人。実業家、書画家。素封家に生まれ、第一回衆議院選挙に当選、政界に身を置くと共に、日清汽船株式会社の設立に深かわり、実業界でも活躍した。幼少の頃より漢学に親しみ、作詩は絶句を専らにし、晩年は画にも長けた。これはその画集で、雨山が序を書いており、その中で、「王維は詩中に画あり画中に詩ありと言っているが、今は碧堂においてまたこれが言えよう（原文漢文）」と記している。

49　一楽荘印賞
田近竹邨　大正一一年（一九二二）
二冊　大麦学院
縦一八・九　横二二・五他

田近竹邨（一八六四―一九二二）、名は岩彦、豊後竹田の人。日本画家。初め画を潮野龍徳に学び、京都府画学校で田能村直入に南画を学ぶ。一九二一年、小室翠雲、山田介堂らと日本南画院を創立した。これは後に編まれた蔵印集で、雨山が序を書いており、その中で、「私は京都に寓居して竹邨と知り合うことよりわけ親く、南画院を創設するや私を顧問に迎えてくれた。未だ一年にならずして逝ったのが惜しまれる（原文漢文）」と記している。

50　有竹斎蔵鈍印
上野有竹　大正六年（一九一七）序
三冊　大麦女子大学図書館
縦二九・八　横二八・一他

上野有竹（一八四八―一九一九）、名は理、一号丹波篠山の人。実業家。藩校振徳堂に学ぶ。明治一三年、大阪の朝日新聞社に入社し、翌年から村山龍平と共に経営にあたり、大新聞社に育てあげた。日中の美術品蒐集に力をそそいだ。その収蔵の多くは京都国立博物館、上野コレクションとなっている。大正六年の酉民寿蘇会に参加する一六〇顆の実押印譜で、雨山が序を寄せている。

51　真草千字文
小川鶴斎　大正元年（一九一二）
一帖　大麦女子大学図書館
縦二九・四　横一四

小川鶴斎（一八七〇―一九一六）、名は為次郎。江戸本郷の人。実業家。大学南校（東京大学の前身）で学び、実業界で活躍、百三十銀行頭取取、阪神電鉄取締役等を務めた。現在国宝に指定されている智永（真草千字文）を所蔵し、一九一二年、京都の山田聖華坊から小林今真製版所のコロタイプ印刷により影印出版したのがこれである。雨山と親しく交わり、大正六年の酉民寿蘇会に参加している。

52　華甲頌寿冊
庄司杜峯　昭和七年（一九三二）序
一帖　大麦学院
縦二二・　横一三・六

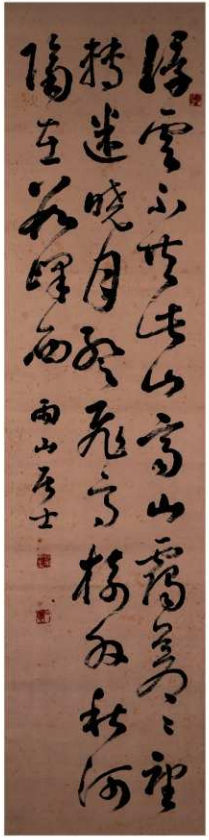
庄司杜峯（一八七二―一九四四）、名は乙吉、秋田阿仁の人。実業家。東京高等商業学校卒業後、紡績業界で活躍、東洋紡績社長を務めた。漢詩の添削を雨山に請い、詩集多数を刊行している。これは、昭和八年、杜峯の華甲（還暦）にあたり、東洋紡の同僚が作った詩歌書画冊で、雨山の題簽と序がある。雨山は序の中で、「君が詩人を以て自居しないのは、その経世の志を詩に借りて発しているのみだからであろう（原文漢文）」と記している。

53　宝硯斎硯譜
谷上隆介　大正一一年（一九二二）
一冊　松村茂樹氏
縦二八・五　横一九・四

谷上隆介（生卒年未詳）、高島屋美術部長を務めた谷上は、大正一〇年（一〇月、呉昌碩の展覧会開催のため、雨山の紹介状を持って呉昌碩を上海に訪ねいる。この時から谷上は、中国古硯の蒐集を始め、三年間で宋明清の硯百五十余点を得て、写真版硯譜としたのがこれで、雨山の封面と序がある。雨山は序の中で賛ぶところは、その材質が精美であり、発墨が善いことである（原文漢文）」としている。

図版

作品解説と一部掲載順が異なります



1

2

16

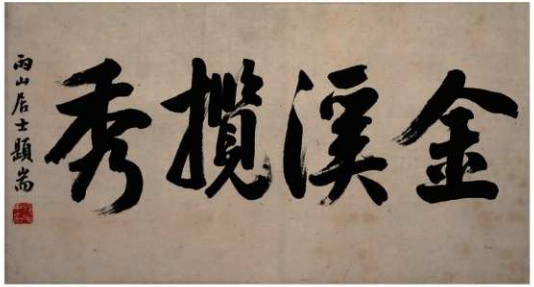
19

20

21

22

3



5

17

27

26

25

24

28

31

30

4

6

7

8

10

9

12

11

14

13

18

15

29

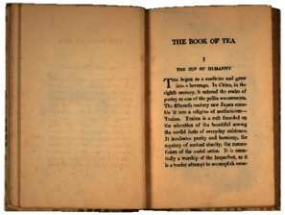
23

32

33

35

34



THE BOOK OF TEA

I

THE CUP OF HUMANITY

THE CUP OF HUMANITY

THE CUP OF HUMANITY

37

38

39

40

41

42

43

44

45

46

47

48

49

50

51

52

53

大妻女子大学博物館特別展
「長尾雨山とその交友―書画文墨趣味ネットワークの人々」

図録制作　株式会社 研文社
発行日　二〇一五年一月一四日
編集・発行　大妻女子大学博物館（東京都千代田区三番町一二　図書館棟地下一階）